

群 教 セ	E03 - 03
	平 18.234 集

よさを認め合い、 協力し、連帯感を深める生徒の育成 — 学校行事をつなぐ「2-1 絆プロジェクト」の活動を通して —

特別研修員 岡根 康浩 (太田市立尾島中学校)

《研究の概要》

本研究は、中学2年生を対象に、互いのよさを認め合い、学級のために協力して活動する中で、連帯感を深めることを目指したものである。具体的には学校行事をつなぐ「2-1 絆プロジェクト」の活動の中で、「頑張りカード」や「協力カード」を活用し、自他の取組の振り返りを通して、今までの自分や級友を見つめ、学級の中での自分の役割を見だし、実行する。この過程を通して、生徒間の望ましい人間関係の構築を図るようにした。

○ はじめに

急激に変化する社会の中であって、生徒一人一人が豊かな人間性をもち、自ら学び自ら考え、自ら解決していく力など「生きる力」を育成していくことが強く求められている。そのためには、生徒の生活基盤である学級において、一人一人がさまざまな活動を通して望ましい人間関係の構築を図り、級友との連帯感を抱くことができるようにしていくことが大切であると考えた。

本学級（中学2年生、男子12名、女子22名、計34名）の生徒は、明るく元気があり、楽しい雰囲気の中で生活している。しかし、表面的には仲が良いように見えていても、相手の気持ちが十分考えられない言動も見られる。5月下旬に行われた学校行事（校外学習）の事後の振り返り活動でも、計画を立てる場面で「自分の行きたい場所を押し通してしまった」「班長任せで協力できなかった」といった反省が多かった。生徒は、級友との関わりを大切にしたいと考えているが、実際には自己の意見や感情を主張することが多く、積極的に協力できない場面が見られる。これは、生徒が学級集団の中で、自分自身の考えに価値の重点を置き、級友の行動、発言、気持ちに意識が向きづらく、互いのよさを認め合うことのよさに十分気付いていないからだと考える。また、その原因として積極的に学級の活動に関わっていくことが、学級のためになり、学級を支える力となっていることを実感した体験が少ないからだと考える。そこで、学校行事を通して、互いのよさの認め合い、目標

を達成しようと協力して活動することのすばらしさや大切さを体験的に学ばせたいと考えた。

学校行事には、級友と関わり、時には自己の感情を抑え、学級集団のために活動する場がある。また、学校行事に向けた個人や学級の目標をもち、その目標達成を目指して活動するなかで、多くのことを学び、変容が見られるようになる。そこで、体育祭、合唱コンクールの2つの学校行事をつなげ、気持ちの高まりを持続させることで、大きな変容が期待できると考えた。

学校行事をつなぐ「2-1 絆プロジェクト」の活動は、生徒が学級として何を目標にし、個人として何を目標にするか、そして、それらの目標に向けて一人一人に何ができるかを具体的に考え、実行する。その過程で級友の取組からよさを見付け、認め合いを繰り返し行うことで、学級や級友のためになる自己の役割を見だし、学級や個人の目標達成に向けて協力できるようになると考える。このような活動を通して、互いのよさを認め合い、協力し、級友との連帯感を深める生徒を育成したいと考えた。

I 研究の概要

1 基本的な考え方

(1) 「よさを認め合い、協力し、連帯感を深める」とは

「よさを認め合う」とは、一人一人の生徒が学級や級友のために、「前向きな考え方や行動、頑張り、努力」をし、さらに、級友のそれに互いに

気付くこと、つまり、相手のよさを互いに納得し合う人間関係を築くことと考えた。

学級生活の向上は、一人一人の前向きな考え方や行動、頑張り、努力によって成り立っている。しかし、生徒の多くは級友を理解する際、「優しい」「明るい」といった性格面を個のよさにとらえがちである。そこで、学級や級友のためになる考え方や行動面にも個のよさがあることに気付かせ、そのよさを認め合う態度を育てていきたい。

また、「協力し、連帯感を深める」とは、こうした人間関係を基盤にして、学級の目標達成に向け、学級のために自己の役割を見いだし、互いに力を合わせて活動することと考えた。そして、学級の目標達成のために、自分にできることを具体的に考え、自己のもつよさを発揮しようとする態度や級友との関係を意識し、大切にしたいという自然な思いを育てていきたい。

2 研究の内容及び方法

(1) 研究の内容

研究主題にせまるため「2－1 絆プロジェクト」の活動の中で、「頑張りカード」や「協力カード」を活用し、下記の指導1～3を行うこととした。

○ 指導1

体育祭に向けた取組の中で、一人一人の級友に「よさ」があることを確認し、「頑張りカード」を繰り返し交換し合うことで、級友のよさに気づき、互いのよさを認め合えるようにする。

○ 指導2

合唱コンクールに向けた取組の中で、学級として「協力する」ことの具体的な活動を確認し、「協力カード」で自己の活動を振り返ったり、「頑張りカード」を交換し合ったりすることで、学級のためになる自己の役割を見いだし、協力して活動できるようにする。

○ 指導3

合唱コンクール直前に、コンクールに向けた学級の活動の様子をビデオで確認したり、級友全員に書いた「頑張りカード」を交換したりして、級友一人一人の頑張りを認め合う。また、コンクールに向けた取組の前と後で、自分自身の気持ちや学級の変化及びその理由を確認し合うことで、一人一人が学級の一員としての達成感や級友との連帯感を深められるようにする。

(2) 研究の方法

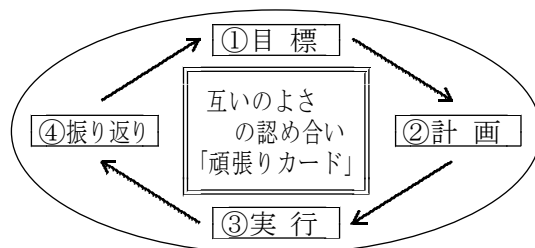
ア 「2－1絆プロジェクト」の活動について

「絆」とは、「体育祭や合唱コンクールを通してどんなクラスにしたい」という投げかけに、「みんなの絆が深まったクラス」と言った生徒の言葉が活動名の由来である。

「2－1 絆プロジェクト」とは、学校行事に向けての練習の取組の中で、生徒と教師が学級の目標達成に向けての考えを出し合い、共に汗を流し、よりよいものを作り上げることを目指した活動である。そして、その活動の振り返りを通して、互いのよさを認め合い、共に力を合わせることのよさに気付かせるとともに、級友との連帯感を育てることを目指したものである。

具体的には、体育祭、合唱コンクールの2つの学校行事を通して、①目標を考える、②計画を立てる、③実行する、④振り返る活動のサイクル(資料1参照)の中で、互いのよさを認め合っていくために、「頑張りカード」を活用する。

資料1 「2－1絆プロジェクト」の流れ

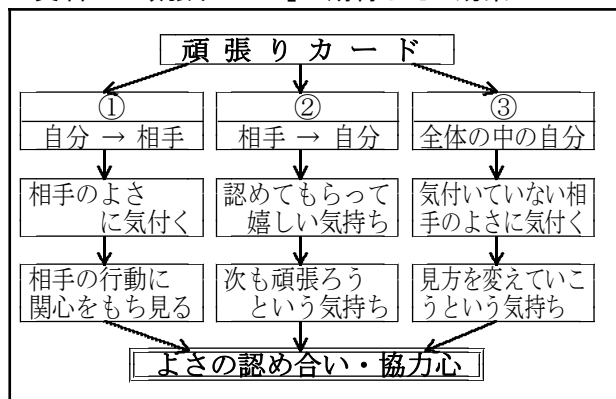


「頑張りカード」には、次の3つの効果があると考えられる。(資料2参照)

- ① 「自分が級友の前向きな頑張りや努力した事実を書くこと」により、相手のよさに気付こうとする気持ちを養い、相手の行動に関心をもち、見ていこうとするようになる。
- ② 「相手から自分の頑張りを見てもらうこと」により、自分の頑張りや相手を認めてもらうことの嬉しさを感じるだけでなく、次も頑張っていこうという意欲がわくことにつながる。
- ③ 「クラス全体を知ること」により、自分の見方ではなかった相手のよさを知ることができ、今までの見方を変えていこうという意識も芽生えるのではないかと考える。

これらを繰り返していくことで、互いのよさを認め合う気持ちと同時に、自分自身も前向きに協力していこうとする気持ちが育つことが期待できると考える。

資料2「頑張りカード」で期待したい効果



イ「学校行事をつなぐ」ことについて

生徒は、学校行事において級友と関わりながら、その行事や学級の目標達成を目指して活動する。学校行事は学級経営上、学級の目標に向けて一人一人がもつ力を出し、協力し活動することの大切さを体験的に学ぶよい機会である。ところが、行事を終えると、協力し努力し合ってきた仲間意識が薄れることがよくある。そこで、学校行事をつないでよさを認め合う活動を継続することで、一つの学校行事で学んだことを次の学校行事にも持続させ、生徒の確かな成長を期待できると考えた。

2つの学校行事をつなぐために「2-1絆シート」(資料3参照)を活用する。

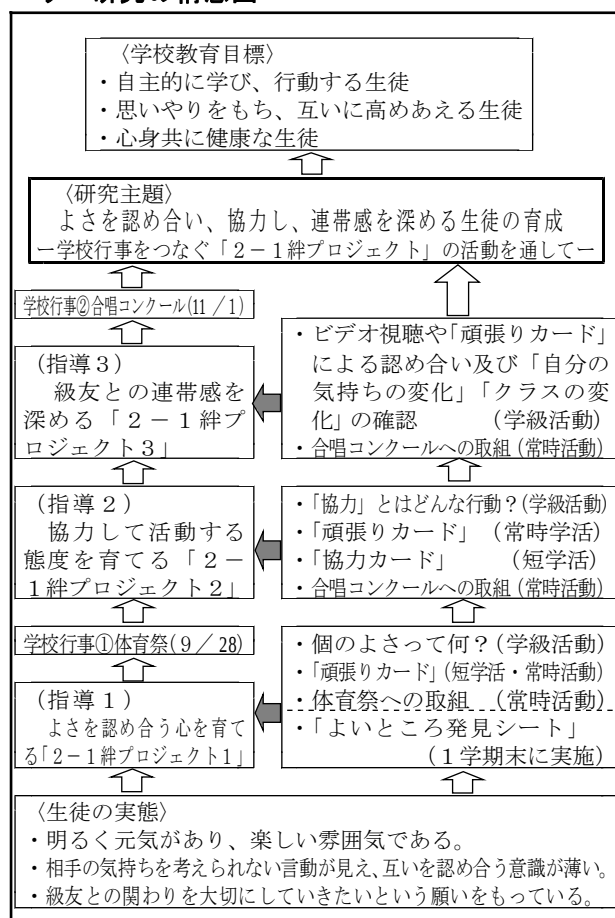
資料3「2-1絆シート」の基本形

「2-1絆シート」	
体育祭の目標	
クラス	
個人	
頑張りカード (体育祭練習期間中)	頑張りカード (体育祭後)
体育祭を通して学んだこと	
合唱コンクールの目標	
クラス	
みんなのためにできること	
頑張りカード (合唱コンクール練習期間中)	頑張りカード (合唱コンクール1週間前)
体育祭・合唱コンクールを通して学んだこと、気持ちの変化	

学校行事に向けての取組を通して級友と関わり、気付いたり、学んだりしたことをまとめ、生徒相互の気持ちを相知合うために用いるものである。シートは、各行事の目標達成に向けた活動を通して級友と認め合ったり、励まし合ったりした

カードと自らの気付き等を一覧できるように整理していく台紙である。シートは教室背面壁に掲示し、いつでも生徒が互いに見合えるようにする。

ウ 研究の構想図



エ 抽出児について

本研究では、研究の成果や課題を確認するために、抽出児及び学級全体の活動の様子、「頑張りカード」「協力カード」等への記入内容、アンケートの比較、感想や発言などをもとに行った。

抽出児A子は、活発で、後期学級委員に立候補した。学級委員として、自分の思い通りにならなかったり、気持ちがのらなかったりすると、学級の雰囲気に影響を与えることがあるが、クラスの活動に積極的に取り組む姿勢ももっている。

Ⅱ 実践の概要

1 よさを認め合う心を育てる「2-1絆プロジェクト1」(指導1)

(1) 指導の概要

体育祭2週間前に学級委員を中心に、個人種目や学級全員で行うチームジャンプの練習計画、学級目標を決定した。また、体育祭に向けた活動を

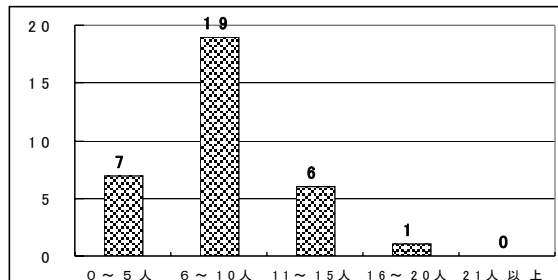
始める前の学級活動で、1学期末に級友のよさを記入した「よいところ発見シート」を活用し、「個のよさ」とは何かを話し合った。そして体育祭への取組（練習や本番）を通して気付いた級友のよさを「頑張りカード」に記入し、それを交換し合い、互いのよさを認め合う活動を繰り返し行った。

(2) 実践のまとめ

1学期末に行った「よいところ発見シート」への記入では、「優しい」「明るい」「〇〇が上手」などの指摘がほとんどで、生徒は性格面や能力面を個のよさにとらえている傾向が強いことが分かった。また、よさを指摘できた級友の人数と記入後の感想から、級友のよさを十分に理解できていない生徒が多かった。（グラフ1参照）

グラフ1 よさを指摘できた人数とおもな感想

○よさを指摘できた人数（自分以外の32人中）

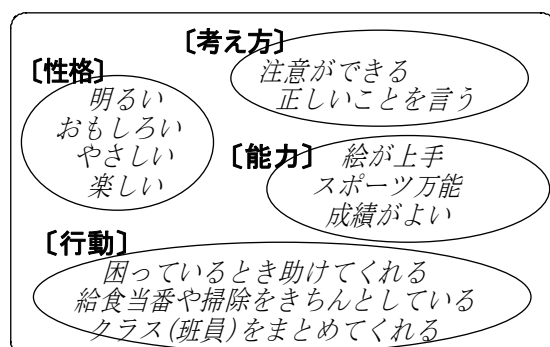


○おもな感想

- ・思っていたより友だちのことを理解していなかった
- ・考えたことがなかったので難しかった
- ・一部の人のよいところしか気付いていない
- ・仲良くしている友だちでも意外と分らなかった
- ・異性について分らなかった

こうした実態をふまえ、まず、性格面や能力面の他にもよさがあることに気付かせたいと考えた。そこで、「よいところ発見シート」に挙げられた個のよさを、意見交換をしながら分類する活動を行ったところ、「性格」「能力」「行動」「考え方」の4つに分けた。（資料4参照）

資料4 生徒が分類した個のよさ

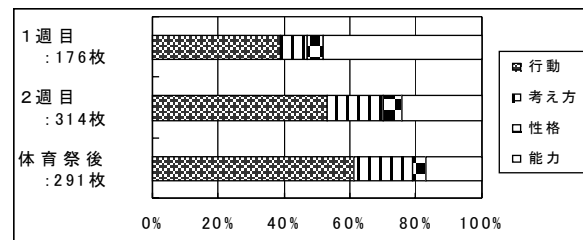


この分類により、「行動」や「考え方」も級友のよさであることに気付いてきた。

次に、「行動」や「考え方」の価値に気付かせたいと考え、「そういった行動(考え)のどんなところが、よさと言えるのか」と問いかけたところ、「みんなのためになるから」「クラスをよくするため」といった意見が出された。そこで、性格、能力だけでなく、「クラスやみんなのためになる行動や考え方」にも、個のよさがあることを確認した。

さらに、体育祭へのクラス練習を通して、多くの級友に目を向け、互いのよさに気付かせせるとともに、認め合わせたいと考えた。そこで、級友の取組から気付いたよさを認める「頑張りカード」を交換し合うようにした。練習1週目は、カードに記入する時間を2回設け、班員に向けてメッセージを書くこととした。2週目からは、「班員以外の人にも書きたい」「書きたいときに書けるようにカードを教室においてほしい」という意見があったため、特に時間を設けず、班員以外にも書いてよいこととした。また、カードを教室背面壁の「2-1絆シート」に貼付し掲示したところ、級友のカードへのメッセージを見合う姿が見られた。グラフ2は、体育祭への取組（2週間の練習期間と体育祭後）の中で生徒が交換し合った「頑張りカード」の内容である。

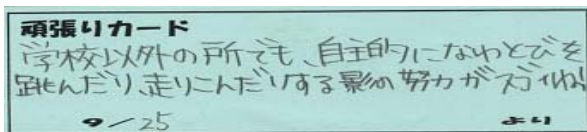
グラフ2 「頑張りカード」の内容の推移と枚数



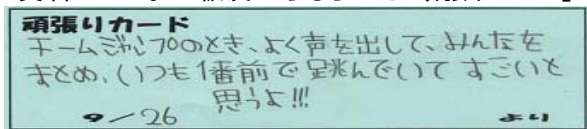
記述内容の分類から、生徒は体育祭への取組の中から徐々に級友の行動や考えといったよさに目が向くようになり、総記述数も増加した。このことから、生徒が行動や考え方を含めた個のよさを理解するとともに、見る対象も特定の級友から学級全体へと広がってきたと考える。また、個々のカードに書かれた内容からも「いつもよく声が出ていてえらいね」「〇〇の練習すごく頑張っているね」といった取組に対する賞賛の記述が増え、「頑張りカード」を通じた認め合いが学級全体に広がるようになった。

抽出児 A 子は、期間中に24人の級友へ43枚の頑張りカードを書き、A 子へは22人の級友から39枚のカードが渡された。(資料5、6 参照)

資料5 A 子が級友に書いた「頑張りカード」

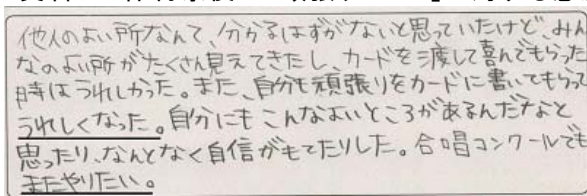


資料6 A 子が級友からもらった「頑張りカード」



A 子は体育祭へのクラス練習を始める前には、「よいところ発見シート」に書かれた級友からの自分への指摘に対して、「自分のことをよく言いすぎだと思う。そんなによいところはない。誰も他人の本質を見抜くなんて無理だと思う」という感想を書いたが、体育祭後には資料7のような感想に変わった。

資料7 体育祭後の「頑張りカード」に対する感想



A 子は、「うれしくなった」「またやりたい」という記述から、級友から自分のよさを認められることのよさに気付いたと考える。これは、うわべではなく、自分が努力したという事実を認められたためと考えられる。また、「喜んでもらってうれしかった」という記述からも、互いのよさを認め合うことができるとともに、認め合うことのよさを感じることができたと考える。

なお、体育祭では、優勝することができた。

2 協力して活動する態度を育てる「2-1絆プロジェクト2」(指導2)

(1) 指導の概要

合唱コンクールに向けた活動を始める前の学級活動で、体育祭に向けた活動を振り返り、「協力する」とはどんな活動かを話し合った。そして、合唱コンクールに向けて「協力する」に値する具体的な行動を学級全員で考え、それを基にして自

己の活動を振り返る「協力カード」を作成した。生徒は、毎日自己評価するとともに、毎週金曜日に1週間の活動を振り返り、成果や改善点を考えた。また、級友同士で「頑張りカード」による認め合いや励まし合いを繰り返し行った。担任は、「協力カード」へのコメントを通して、生徒への励ましやアドバイスを行った。

(2) 実践のまとめ

体育祭のクラス練習では、生徒全員がほぼ毎日、朝、昼休みに参加した。しかし、担任の観察では、練習には参加しているものの、リーダーの指示がないと行動に移せない生徒や力一杯練習に取り組めない生徒、協力して取り組めていないように思われる生徒が多く見られた。体育祭後に、練習への取組について自己評価したところ、ほとんどの生徒が「とてもよくできた」「よくできた」と回答し、その理由は「練習にさぼらず参加できたから」であった。

こうした実態をふまえて、体育祭への活動を振り返り、「クラスの練習に参加していれば、協力していると言えるか」をテーマに学級活動を行った。級友と意見を交換することで、「協力することの根底にある価値に気付かせようと考えた。このテーマに、25人の生徒が「参加だけでは協力でない」という立場に立ち、理由としては資料8のように発言した。

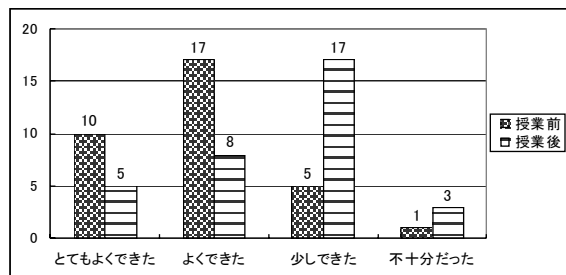
資料8 生徒のおもな意見

- ・全員が一生懸命に練習に取り組まないといけない
- ・リーダーの人だけが一生懸命になっていてもダメだ
- ・クラスの活動だから、みんなで意見を出すべき
- ・一人一人が自分の全力を出さないといけない
- ・その場にいるだけでは協力しているとはいえない
- ・みんながクラスのためにできることをするべき
- ・言われてやるのではなく、自分から進んで練習に取り組まなければいけない

意見交換後、「協力する」とは、「クラス（みんな）のために、進んで自分の全力を出し切る」とことと確認した。授業後、再度「体育祭のクラス練習に協力できたか」という自己評価を行ったところ、グラフ3のようになった。また、授業後に「少し協力できた」「不十分だった」と回答した生徒は、その理由として「チームジャンプで精一杯のかけ声をだせなかった」「リーダー任せにしていたところがある」「練習中真剣さに欠けるときのあった」などを挙げた。これは授業を通して「協力する」ことの価値に気付き、「クラスのた

めに自分自身にできることを行うことが協力なんだ」という意識をもつことができたからと考える。

グラフ3 「体育祭のクラス練習に協力できたか」(33人実施)



合唱コンクールの3週間前に学級目標、個人目標を決定した。学級目標は全員で話し合い、「金賞めざして 創ろう1組のハーモニー 深めよう みんなの絆」となった。

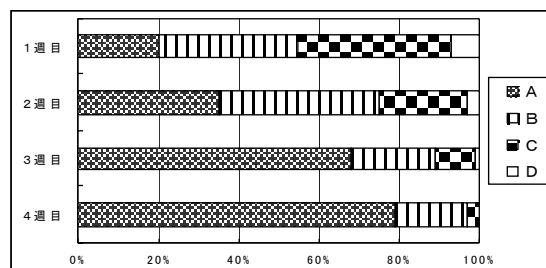
また、高まってきた「協力する」という生徒の意識を持続させ、さらに高めたいと考え、合唱コンクールに向けて「協力する」とは、具体的にどんな行動ができればよいのかを話し合った。そして、毎日の自分の活動を振り返る自己評価を行うとともに、練習の成果や翌週の改善点を記述する自己評価カードを活用していくことを提案したところ、生徒全員の理解が得られた。これを受けて、実行委員（学級委員、指揮者、伴奏者、パートリーダー、副リーダーで構成）が、話し合いで出された意見を基にした、学級共通の自己評価項目を作成した。名称を「協力カード」とし、(資料9参照)合唱練習期間（4週間）は、「協力カード」と「頑張りカード」を活用し、自己の取組の振り返りや級友への励ましやアドバイスを伝え合い、合唱コンクールに向けたクラス練習を行った。

資料9 「協力カード」

協力カード					
2年1組 番 氏名					
	A: とてもよくできた	B: よくできた	C: 少しできた	D: まだまだ	
おもな項目	23日(月)	24日(火)	25日(水)	26日(木)	27日(金)
(1) 統一の声で歌う(強弱をつける)	A	A	A	A	A
(2) 練習時間を大切に(時間を守る・練習中ふざけない)	B	A	A	B	A
(3) CDを毎日聴いて、音程や強弱を覚える	A	A	A	A	A
(4) 友だちを責めない	A	A	A	A	A
(5) 人(リーダー)任せにしないで、進んで練習に取り組む	B	B	A	A	A
(6) 棒りの会が早く始められるように行動する	B	B	B	A	A
(7) 時間を守り、きまり行動する	B	B	A	A	A
今週のよくあった点や反省点	来週の目標(自分が行うこと) 先生より				
最前の声は出るが、全然、弱くない。来週は気持ちを上げて練習しよう。みんなの声を聴いて、自分たちのハーモニーを深めよう。みんなの絆を大切にしよう。 みんなの声を聴いて、自分たちのハーモニーを深めよう。みんなの絆を大切にしよう。 みんなの声を聴いて、自分たちのハーモニーを深めよう。みんなの絆を大切にしよう。					

合唱練習期間4週間の「協力カード」の(5)「人に任せないで進んで練習に取り組む」の自己評価結果はグラフ4のようであった。

グラフ4 協力カードの自己評価の推移



また、「頑張りカード」への記述内容としては、練習への取組に対する賞賛、合唱の技能や態度に関するアドバイス、級友への励ましなど具体的な記述が見られるようになった。

週が進むにつれて、「頑張りカード」へのアドバイスを自分の改善点として挙げる生徒や改めようと努力する生徒が見られるようになった。また、全員分の練習用CDの作成を引き受ける生徒、拡大した歌詞の作成を引き受ける生徒、放課後に指揮や伴奏の自主練習をする生徒、家庭で練習する生徒、CDを聴いて音程を覚える生徒など、学級のために自分にできる役割を見だし、進んで活動に取り組む生徒が多く見られるようになった。

抽出児A子は、各週の「協力カード」の「来週の目標(自分が行うこと)」欄に、資料10のように記述していた。

資料10 A子の「協力カード」への記述

<1週終了後>
音をはずさないように毎日CDを聴いて覚える。
<2週終了後>
強弱をつけて歌う。みんなにもアドバイスする。
<3週終了後>
クラスのよい雰囲気をつくる。体が揺れるように気持ちを込めて歌う。

A子は、当初から学級の目標達成に向けて、個人として何をするかを具体的に考えていた。週が進むにつれて、下線部のような「みんな」「クラス」という記述が見られるようになった。これは、学級の中での自己の立場(学級委員、副パートリーダー)を意識し、学級のために自己のすべきことを見いだすようになってきたからと考える。実際にA子は、実行委員として毎週金曜日の放課後

にパートの改善点を話し合い、翌週の練習計画を作った。話し合いでは、自分のパートだけでなく、他のパートの成果や改善点を挙げ、積極的に練習方法や改善策を提案していた。練習開始時には、「始めよう」と級友に呼びかけたり、自ら歌い方の見本を示し、アドバイスしたりする様子も見られた。また、練習時間をつくりだすために、自主的に他班の給食当番を手伝っていた。このように、学級の役に立とうと自身の役割を見いだし、進んで活動する場面が多く見られるようになった。

3 級友との連帯感を深める「2-1絆プロジェクト

3」(指導3)

(1) 指導の概要

合唱コンクール直前の学級活動における振り返りで、合唱コンクールに向けた活動の様子を編集したビデオを視聴したり、級友全員に書いた「頑張りカード」を交換したりして、コンクールに向けた級友一人一人の努力や頑張りを認め合った。また、合唱コンクールに向けた取組の前と後で、自分自身の中での気持ちの変化や学級の変化を発表し合うとともに、そのような変化が見られるようになった理由を全員で考え、確認した。

(2) 実践のまとめ

合唱コンクール直前に、合唱コンクールに向けた3週間の活動を振り返る学級活動を行った。

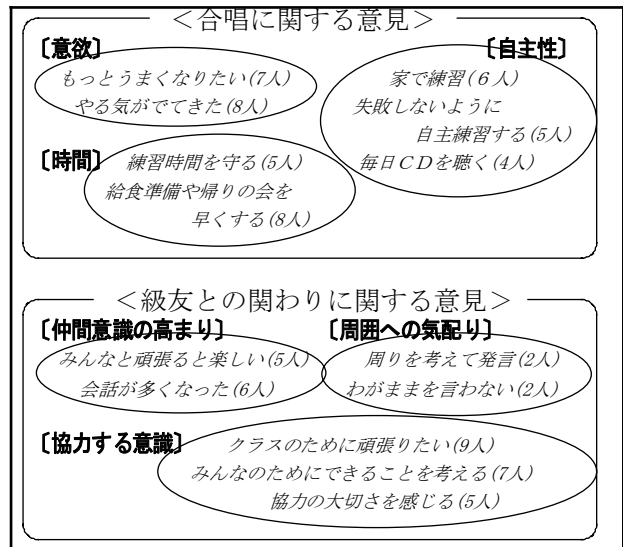
まず、ビデオ視聴を通して自分や級友のコンクールに向けた取組やその頑張りを再確認した。ビデオ視聴中は「〇〇がこんなことをしてくれていたなんて知らなかった」「〇〇がこれをしてくれて助かった」等の発言が聞こえ、自分の目では見られなかった級友の頑張りや努力に気付いたり、一人一人の頑張りにより学級の活動が支えられていたことを改めて感じたりできたようである。

次に、「頑張りカード」に各自が書いた級友一人一人に対するメッセージを全員分用意し、一人一人に言葉をかけながら交換し合った。「頑張りカード」には、級友の頑張りを認める内容だけでなく、コンクール当日に向けてのアドバイスや励まし、頑張りに対するねぎらいや感謝を表す内容も多く見られた。生徒たちは、「感激した」「いままで頑張ってきてよかった」「もっとクラスのために頑張りたい」「自信がもてた」などの感想をもった。自分の活動や目立たない頑張りを級友から認められたことで、自分自身の行動に達成感や自信がもて、次の活動への意欲も向上したと考

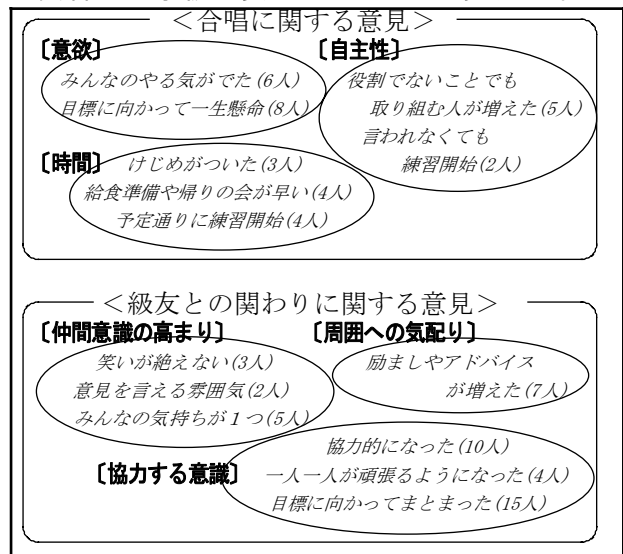
える。

さらに、合唱コンクールへの取組の前と後で、自分自身の気持ちの変化や学級の変化を発表し合った。(資料11, 12参照)

資料11 自分自身の気持ちの変化についての意見(自由記述)

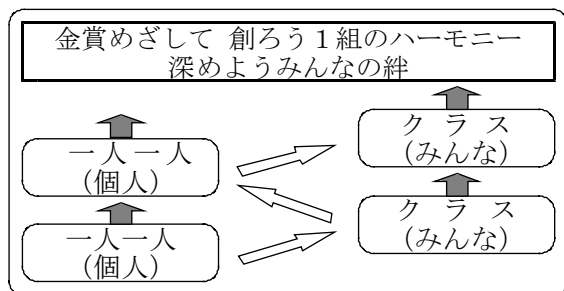


資料12 学級の変化についての意見(自由記述)



生徒からは、級友の発表を聞いて、「自分も同じ」「確かに変わった」などのささやきが聞こえた。そこで、担任が、生徒から出された意見をもとに「どうしてこんなにクラスがよくなってきたのだろう」「どうしてこんなに気持ちが変わってきたのだろう」と問いかけた。すると、学級の変化については、「一人一人の頑張りや努力がクラスをよくしているから」、自分自身の気持ちの変化については、「みんなが頑張っているから、自分ももっと頑張ろうと思うようになったから」という意見が返ってきた。(資料13参照)

資料13 生徒から出された意見のイメージ図



学級全員で目標を話し合って決め、一人一人が目標達成に向けて、自分にできることを具体的に考え、自己のもつよさを発揮してきたことが、学級に反映され、学級の向上に結び付いていたことを感じられたと考える。また、学級の仲間が頑張ることが、自分自身の頑張ろうとする意欲を更に高めていることにも気付いたと考える。授業後の感想にも、「みんなで力を合わせると大きな力になると分かった」「自分の頑張りがクラスのためになっていることが分かって嬉しかった」「みんなで創ってきた合唱だから、絶対金賞をとりたい」「一人一人が頑張ってきたことが、みんなの絆を深めたのだと思う」という記述が多く見られた。

抽出児A子は、自分自身の気持ちの変化について「周りのことを考えて発言するようになった」、その理由は「みんな頑張っているのだから否定的な言い方や押しつけは絶対によくないから」と発言した。また、学級活動を行った日の帰りの会では、「合唱コンクール当日に、みんなからもらった頑張리カードを持って歌いたい」と提案し、級友もそれを受け入れた。資料14は、学級活動の最後にA子を書いた感想である。

資料14 A子の学級活動後の感想

みんなが自分の頑張っている所を見つけていたんだなと思ってうれしかった。もっと頑張ろうという気持ちになった。1組のみんなと一緒に頑張ってきた本当に良かったと思った。目標に向けて一生懸命練習してうちにいつの間にかみんなの心が一つになっていったんだなと思った。絶対に金賞をとりたい。

授業中や帰りの会でのA子の発言や資料14の「みんなと一緒に」「みんなの心が一つ」という記述から、級友との連帯感を感じるようになったと考える。また、「自分の頑張っている所を見つけてうれしかった」という記述からは、学級の一員として活動してきた達成感も感じていると思われる。これらは、「2-1絆プロジェクト」を通して、A子が級友と共に練習を続ける中で、学級のために行っていた級友一人一人の頑張リや努力

を知り、それを受け入れるとともに、A子自身の努力も認められたことで、仲間意識が高まったからと考える。また、一つの目標に向けて共に協力し合うことの大切さに気付いたからと考える。

なお、合唱コンクールでは金賞を受賞することができた。

Ⅲ 研究のまとめ

- 一人一人にはさまざま「よさ」があることやその価値に気付かせることにより、級友の行動に関心をもち見ていこうとする意識を育てることができた。
- 「学級の活動に協力するとはこうすることだ」という具体的なイメージをもつことができ、学級の目標達成のために、個人として何ができるかを考え、行動できるようになってきた。
- 体育祭、合唱コンクールへの取組の中で、「頑張リカード」を活用し、互いのよさの認め合いや励まし合いを繰り返し行うことで、認め合ことのよさに気付いてきた。また、次の活動への意欲を高めることにもつながり、学級のために互いに力を合わせて活動するようになった。
- 行事に向けた取組を振り返ったことで、取組を通して成長した自分や学級の姿に気付くとともに、自己の頑張リや努力が学級を支えていることを感じるようになってきた。
- 行事を通して、互いのよさを認め合うとともに、目標達成に向けて協力し合い活動してきたことで、仲間意識が高まり、行事後の日常生活においても級友との連帯感を意識するようになってきた。

2 課題

本研究は、より具体的な目標を立てやすく、はっきりとした結果がでる学校行事で、互いのよさを認め合い、協力して活動できるように実践してきた。日常の係活動や班活動においても、目標をもたせ、その達成に向けて自己の役割を意識して行動できるような活動を継続していきたい。

(担当指導主事 関口 満)

Web 検索キーワード

【学級経営 中学校 学校行事 学級活動
認め合い 協力 】

(参考文献)

- ・諸富祥彦編集「中学校こころを育てる授業ベスト22」図書文化（2004）